ならずのかね

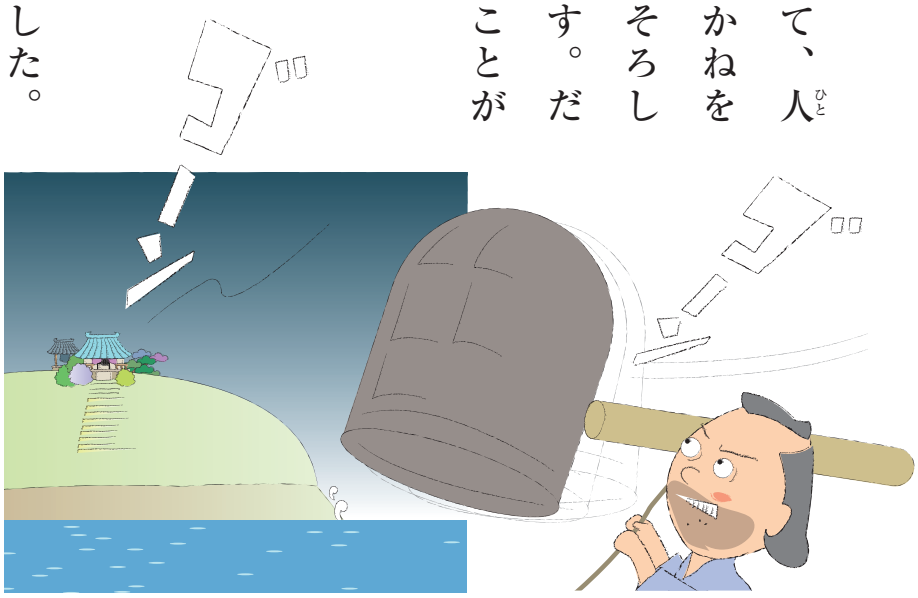
これは　せとないかいの　牛島という　ところの　お話です。

この　しまには　むかしから　「ならずのかね」といって、人びとから　おそれられている　かねが　ありました。このかねをつくと、たちまち　大金もちに　なれるが、しんだら　おそろしい　じごくに　おちると　いう　いいつたえが　あるのです。だから、しまの　人たちは、だれも　この　かねを　ついたことがありませんでした。

ある　年の　お正月の　夜の　ことです。

ゴーン、ゴーン

と、とつぜん　かねの　音が　島じゅうに　ひびきわたりました。人びとは　このぶきみな　音に　ふるえあがりました。



この　かねを　ついたのは、まるおござえもんという　人でした。ござえもんは、くまもとの　人でしたが、いくら　はたらいても　くらしが　楽に　ならないので　この　牛島に　やってきて　りょうしを　していました。

ござえもんは、このかねの　いいつたえを　聞いて、なんども　かねの　下に　来て、つこうか　つくまいか　考えていましたが、とうとう　この夜　かねを　ついたのでした。

その　あくる日から、ござえもんの　船は、たくさん　魚が　とれるように　なりました。そして、たちまち　大金もちになり、せとないかい一の　船もちになりました。

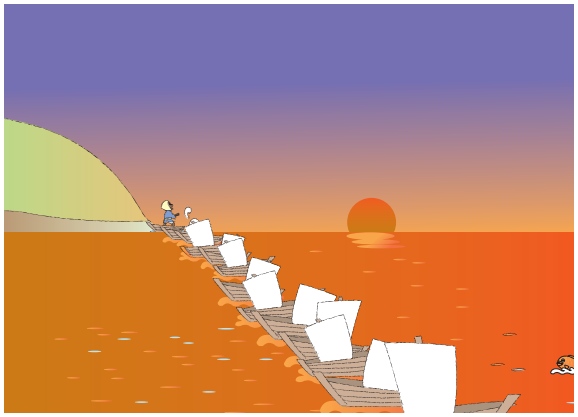
大金もちに　なってからの　ござえもんは、毎日、毎日、ぜいたくを　するように　なりました。

ある　日の　ことです。ござえもんは、

「わしの　船を　ぜんぶ　海に　ならべて　ながめて　みたいものじゃ。」

と　いって　自分の　船を　日本中の　海から　よびもどして　せとないかいに　ならば せました。

ござえもんは、山の　上から　この船を　数えはじめました。ところが、ぜんぶ数え おわらない　うちに、日が　くれてきました。そこで、ござえもんは、



「お日さま、しずむのは　しばらく　まって　くだされ。」

と　いって、もっていた　金の　おうぎで　お日さまを　まねき かえしました。すると　どうでしょう。西の方へ　しずむは ずのお日さまがまた　のぼって　きたのです。おかげで　ござえ もんは　船を　ぜんぶ　数える　ことが　できました。

「どうじゃ。わしは、この　よで　一番の　大金もちじゃ。 お日さまでも　わしの　ねがいを　きいて　くれたぞ。」

と　いばって　言いました。

やがて、おいわいの　さかもりが　はじまり、大にぎわいを　していた　時のことです。今まで　晴れて　いた　空が　きゅうにくもって、かみなりが　なりひびき大あらしに　なりました。

ござえもんの　船は、あっという　間に　一そうも　のこらず　海の　そこに　しずんで　しまいました。

すべての　船を　なくした　ござえもんは、「ならずの　かね」の　前で　いつまでも　立ちつくしていたと　いう　ことです。